

Be My Style

現代のライフスタイルにふさわしい発想と感性で、湖国にCoolな風を起こすものづくりの秘密に迫ります。

ひと・わざ・みらいへ



伝統の技法でモダンアート
和の空間を彩る斬新な唐紙

東近江市の永源寺で創作活動と子育てに充実した日々を過ごす野田拓真さん・藍子さん夫妻。「BIWAKOビエンナーレ2016」出品作の屏風「Play」は滋賀の自然と子どもたちからインスピレーションを得て制作した。

野田拓真さん・藍子さん

(版画造形作家)

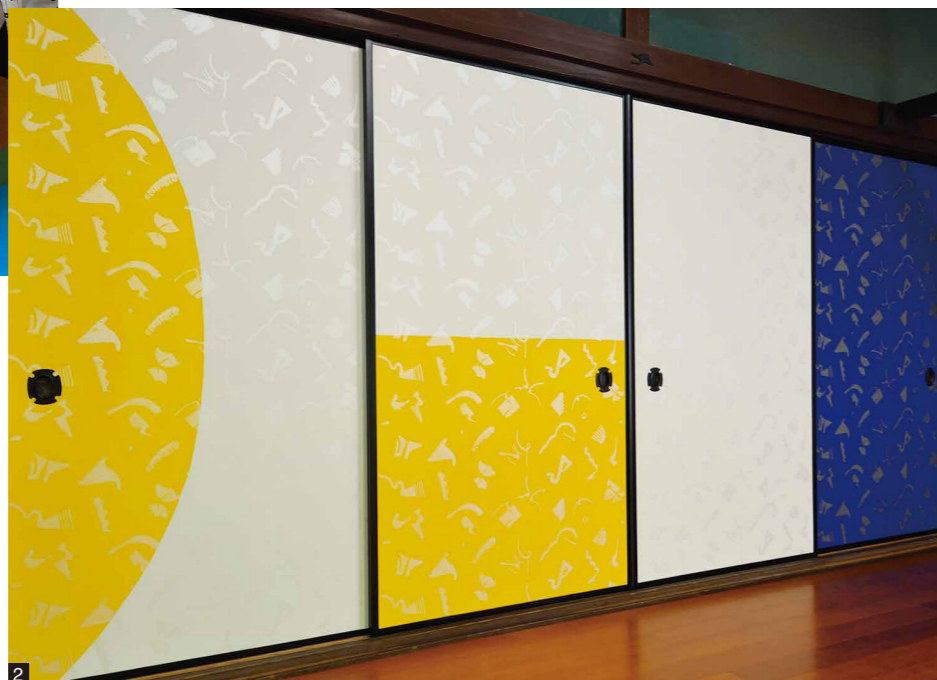
(図案家)

野田版画工房

京都から自然豊かな永源寺に移り住み、工房を構えて現代的な感覚の唐紙を制作している野田拓真さん・藍子さん夫妻。重厚な古民家や新しい住宅の襖、ホテルや店舗の壁紙や衝立など、さまざまな空間に溶けこむ新しいデザインで注目を集めている。唐紙の魅力、そして創作の舞台裏についてお話をうかがった。



1: 木枠にガゼを張った篩(ふるい)は唐紙独特の道具。まず刷毛(はけ)で篩に絵の具をつけ、その篩を版木に当てて絵の具を均一になじませる。2: 拓真さんの両親のために二人で初めて共同制作した襖。人が集まること多い家なので楽しい場になるようにという思いがこもったデザイン。キラの地模様は賑やかな会話や弾むような音のイメージ。

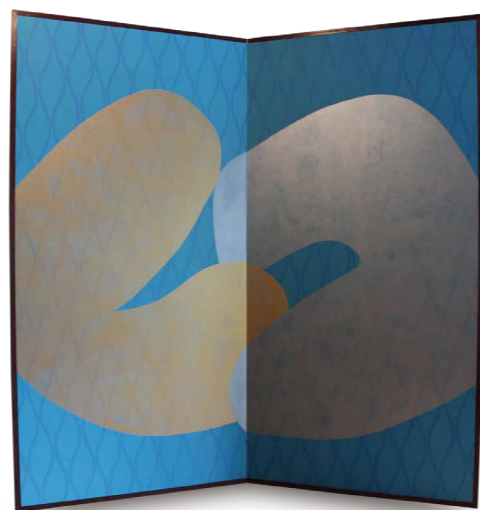


日本の古い住空間に溶けこむ 斬新なデザインの唐紙

時雨しぐれが通り過ぎた後、冬の陽ざしが部屋の奥へと伸びていく。襖が淡い光に照らされると、唐紙の文様に含まれる雲母うんも(キラ)が穏やかにきらめき始める。里山の風景が広がる永源寺にある「野田版画工房」で、その静かな光景に見ほれていると「季節や天候、時刻によつてキラの見え方が変わるんですよ」と野田藍子さんに声をかけられた。

「電気がなかった時代に家の奥へと巧みに光を取り入れる工夫だったんですね」

唐紙を毎日見慣れているはずの藍子さんもキラの光るさまを愛でるようにしみじみ眺めている。何度眺めても、飽きることがない



嬉野温泉(佐賀県)ひさご旅館の屏風「HISAGO」

というように。

唐紙とは襖や屏風びょうぶ・衝立などに使われる装飾紙のこと。版木と顔料(絵の具)によつてさまざまな文様が施され、古くから日本家屋の室内を装飾するものとして広く使われてきた。野田拓真さん・藍子さん夫妻の野田版画工房は、長い歴史と伝統のある唐紙の世界にモダンなデザインで新風を吹きこみ注目を集めている。従来の唐紙にはあまり見られないはつきりした色使いと弾むような輪郭線、大胆な構図の唐紙を張った襖は基本的に呼ぶのがふさわしい斬新さだ。

※1 鉱物の雲母(うんも)を砕いて粉状にしたもの。

「色を載せた部分に残る、たらしこみ」と呼ばれる波状の自然な表情が手刷りの美しさ。その表情が襖全体に均一でないときれいに見えないので、「版ごとに異なるべく速く絵の具をつけてリズムよく摺っていく。この過程が好きです」



唐紙の摺りは色を載せた版木の上に紙を置き、手のひらでなでるようにして版木の色を紙に写す。 ※2色を塗って乾かないうちに他の色をたらし、にじみの色彩効果を生かす技法。

自由な発想 vs 伝統技法 夫婦での共同制作から 新たなスタイル誕生

すばらしいコンビネーション！と思いきや「最初は全然そうじゃなかったんですよ」と拓真さんは苦笑いする。

「唐紙のことをまったく知らない妻はすぐ自由な発想でラフなスケッチを描いて『これは丸く黄色くして』などと指定するんですが、それは伝統的な唐紙の美しさにこだわりのある僕にしたら『なんじゃそりゃ?!』というようなことばかりで(笑)。初めはたびたび意見がぶつかりました」

自分なりに考えて技法を工夫し、スケッチに沿った唐紙を作り襖に仕立ててみたところ、予想以上に面白いものができた。 「唐紙の技法を応用して絵画的な感覚で作りました。この襖を制作して、特に妻は『これは面白い!』と思ったようです」

現在は、藍子さんが地模様デザインと木版制作、拓真さんは総合的な色合いや形を決め、唐紙の制作と役割をはっきり分けている。

「独立した時は唐紙屋さんみたいな仕事の仕方を想像していました。でも、妻と一緒に仕事をしていくうちに、一つの作品ととらえて制作するようになってきました。二人とも常に新しいもの、今まで見たことがな

いものを創っていきたくて考えています」

創作の源は森や山、花、果物といった自然のものやアート作品、陶芸の作品など身のまわりにあるあらゆること。生まれてくる我が子を感じつつ、新しい命のイメージで制作した自宅の襖「まちわび」(表紙の作品、滋賀の自然の中で跳んだり泣いたり笑ったりと子どもたちが感情豊かに遊んでいる姿を屏風に写した「Play」など、近年は子どもたちの時間からデザインの着想を得ることも。家族の温もりでいっぱいになる永源寺の工房から、次はどんな作品が生まれるのだろうか。もっともっと新しい唐紙を見てみたい。



DATA
野田版画工房
東近江市和南町849
TEL. 050-5802-9585
http://nodahanga.com

初めて目にした唐紙 その「新しさ」に 魅了されて

「僕たちの作品には、二面性があると思っています」と拓真さんは話す。「版で摺ることによってフリーハンドで描いたりムラを出した紙を作ったりするのは、どちらかというと絵画的な要素。その両方が一つの襖の世界にあり、アンバランスな感じが面白く思っています」

斬新でありながら古民家の純和風の空間にまったく違和感なく溶けこむのは、野田版画工房の唐紙が伝統的な手仕事によって創り出されているからだ。

野田さん夫妻はともに美術短期大学で銅版画を専攻。卒業後、藍子さんは銅版画や木彫のレリーフなど創作活動を続け、拓真さんは漠然と手仕事に携わりたいという思いを抱えながらまったく違う仕事をしてきた。そんな時に偶然出会った唐紙に魅了され、拓真さんは「唐紙」で職人見習いとして働き始める。唐紙を作るプロセス、歴史的な背景、何百年もかけて培われてきた伝統文様：すべてが新しく面白かった。

「襖とはどういうものなのか、光の入りの方を見せ方も含めて総合的に考えて唐紙を作らなくてはいけない。そのためには住宅のこともわかっておかなければいけない。やればやるほど、唐紙の魅力にさらに強く感じていきました」

唐紙の職人として仕事を始めて数年たち独立を始める頃、拓真さんに再び大きな転機が訪れた。

きっかけは、拓真さんの両親から自宅の襖の制作を依頼されたことだった。当時はすでに藍子さんと結婚して、「妻には木を彫る技術があつて道具もそろっている。それなら二人で作ってみてはどうだろうか」。そうして、藍子さんがデザインして版を作り、拓真さんが紙を染め文様を摺って形にするという共同制作がスタートした。

「二人で襖を作ってみたら、それがとてもしつくりきたんです」と拓真さん。

これが「伝統の技法!!」一枚の唐紙ができるまで

色焼け止めのため、刷毛で和紙に胡粉(白の顔料)を一面に塗り下地を作る。



顔料を乳鉢で混ぜる。二度と同じ色ができないので、摺り上げる襖の枚数分だけまとめて色を作る。



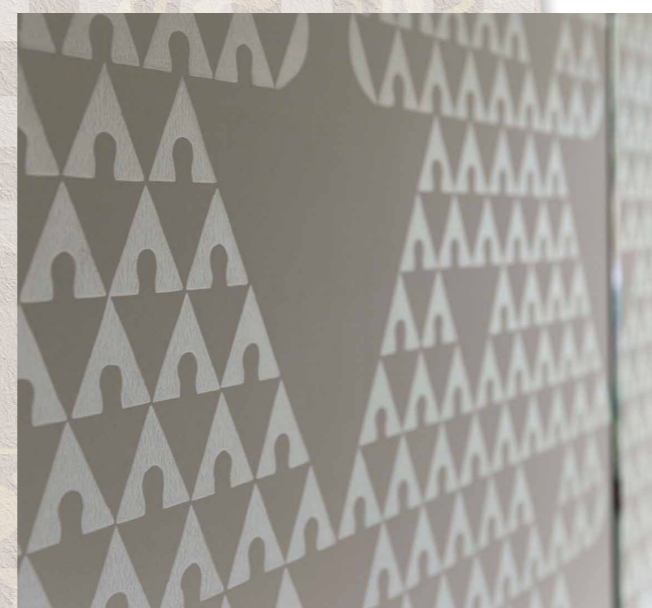
乳鉢に入れた顔料に少量の水を加えて乳棒で練る。小さなダマ一つあっても均一な仕上げにならないため、念入りに練った後さらに目の細かい漉し器に通す。



唐紙独特の道具「篩」に刷毛で絵の具をつけ、版木に当てて色をつける。



版木に紙を載せて手でなで摺る。紙をずらしながら小さな版木で上下左右に連続模様をつけていく。わずかなズレも許されない作業を10回ほど繰り返して襖1枚分が摺り上がる。



唐紙は光と陰影によってさまざまに表情をかえる。